

子どもの読書活動の 推進に思う

新藤 久典

読者の皆様は、「四月二十三日」は何の日かご存じだろうか。

スペインでは、「サン・ジョルディの日」と呼ばれているそうである。また、この日が、「ドン・キホーテ」の著者セルバンテスの命日にあたることから、「本の日」とも呼ばれ、女性が男性に本を送る日という、素敵な習慣が広く行われているとのことである（ちなみに、男性は女性に赤い薔薇を送る）。スペインの提唱で、一九九五年に国連のユネスコは、この日を「世界図書・著作権デー（世界本の日）」と制定した。日本では、二〇〇一（平成十三）年に、「子どもの読書活動の推進に関する法律（子ども読書推進法）」が制定され、その十条において、「国民の間に広く子どもの読書活動についての関心と理解を深めるとともに、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高めるため、子ども読書の日を設ける。子ども読書の日は、四月二十三日とする。」と定められている。

では、現代の小・中・高校生の読書量はどの程度なのだろうか。全国学校図書館協議会（SLA）が毎年行っている調査によると、一ヶ月間の読書量は、昨年度までの過去五年間の平均で、小学生が九・八冊、中学生が四冊、高校生が一・七冊である。また、一ヶ月間、全く読書をしない子どもの割合を見ると、過去五年間の平均で、小学生が五・五％、中学生が十五・一％、高校生が四八・一％である。これらの数字も、実は、前記の子どもの読書活動推進法制定が一定の効果を発揮し、徐々に改善されてきている上での数字である。

皆様はこの数字をどのようにご覧になるだろうか。

私は、特に不読者の割合が余りにも高いことが気がかりである。私は、校長時代、関東地区及び東京都の学校図書館協議会（小・中・高等学校合同の組織）の会長職を経験したこともあり、子どもの読書活動の充実策を国や都道府県、区市町村に働きかける立場にあつたこともあり、抜本的な改善策はないものかと心を痛めてきているが、昨今、特に気にかかるのが、公立学校の学校図書館の機能の低下である。まず、図書資料等の購入予算は削減され、子どもが望む図書さえ十分に購入できない状況にある。そのため、学校図書館を利用した魅力ある授業の展開は望めず、中学校における学校図書館の授業での利用率は低下の一途を辿っている。また、一部の自治体では図書館補助員の派遣などの人的措置がなされ、終日開館という理想の姿が実現され、子どもたちの利用を高めている一方、八割を超える学校が昼休みだけの開館、放課後も週一回開館という寂しい状況が続いている。また、環境面でも、建設当初の部屋はコンピュータ室に奪われ、校舎の隅のほうの余った普通教室があてがわれているという学校が少なくない。また、我が子の通う学校の学力調査の点数や進学状況には高い関心を示す保護者も、学校図書館にはほとんど関心を示さない。

スペインのように、愛する人に本を贈る習慣はいつになつたら日本にも定着する日が来るのだろうか。私は、教職を目指す学生に、もつと読書の楽しさを伝え、音楽の授業でも積極的に学校図書館を活用するよう指導しなければと思う今日この頃である。

● しんどうひさのり 本学教授（教職科目・国語）